"Vier mathematische Abhandlungen"（東京，1907）のほかに，"京都大学紀要"を忘れてはならないだろう．この期間の京大紀要には次の人々の数学論文が載つている．

河合十太郎（1）　三輪桓一郎（1）
吉川實夫（1）　和田健雄（2）
西内貞吉（1）

しかし，ごく大体から見れば，この1907～1910年の期間においては，数学の国際的発表機関といえば，本会記事の外にはなかつた，といつても，たいした言い過ぎではないだろう．そこに現われたのが，1911年における東北数学雑誌の刊行であつた．

もう一つ記憶に残るのは，そのころ行われた本会の通俗講演のことである．もつともこれは物理方面の話が多かつたが，ただ一つの異例として，私が入会した1907年の12月5日に，'関先生二百年記念講談会'というのが，神田一ツ橋の高等商業学校大講堂で開かれた．藤澤さんの座長で，菊池大麓さん，狩野亨吉さん，林鶴一さんの講演があり，聴講無料のためか，非常な盛会であつた．

こんなことを回想しながら，また一方で，東京数学会社創立80周年の今年こそは，和文最初の西洋数学書柳河春三の"洋算用法"（1857）刊行の100周年に当ることなどを思い浮べると，いまさらながらわが国における数学の歩みについて，深く反省せずにはおられなくなる．(1957. 7. 26)

数 学 会 の 思 い 出

辻　正　次

もう30何年も昔のことであるが，しかし何だか昨日の様にも思えて，年月のたつことの早いのを痛感する次第でありますが，その頃は物理と一緒で，日本数学物理学会といつて，年会も物理と一緒に，旧理科大学の大講堂（これは震災の時取りこわした）で開かれ，数学の講演もごく小数で大部分物理の講演であつた．長岡先生が一番前の席に居て，物理の講演に対して，盛んに辛棘な批評を下して居られたのを記憶している．後に数学が物理から分離して，年会の講演を開く様になつたが，しかし講演数も少く，たしか20を越えなかつたようで，代数も幾何も全部同じ室で講演も一日ですんでしまつた．其頃は証明も全部黒板でやつたものである．

それから通俗講演が時々開かれ，旧理科大学の大講堂で夜間に開催された．学生の頃，吉江先生の集合論の概要をきいた．

中村先生だつたか，寺澤先生だつたかの提案で，外国の雑誌の論文を証明もつけて邦文で出版する計画が実行され，大変便利であつたが，いつの頃からか消えてなくなつたが，も一度復活してほしいものである．

これは数学会とは関係のないことであるが，日本数学輯報の編集に多年関係した．これは数学以外他の自然科学の各分野に夫々輯報があり，日本の学界の主な論文はこれに集中するという方針で医科などは全部これに主な論文を集中していたようである．吉江先生がChairmanで，その下で御手伝いしたのであるが，吉江先生は一々原稿の外国文の間違いをなおして，これはヒドイ独乙語だとこぼしておられた．数学会のJournalが出るようになり，これに主な論文がのるようになつて，輯報の影が薄らいだようであるが，永年関係した雑誌なので何か郷愁を感じる次第です．

入 会 当 時 の 想 い 出

末　綱　恕　一

数学会は此頃随分盛大になつて，日本の数学の隆盛を示すものと，まことに慶賀に堪えない．終戦前までは数学物理学会の一部であつたが，私が入会したのは関東大震災の前年で，35年前（1922

年）のことである．当時数学と物理とは別々に年会を開いていたが，数学は四月の初めにあつたようである．四月三日が神武天皇祭という祭日であつて，その頃であつたように記憶している．しかも東大であつたのである．当時の数学教室は今の理学部本館の新館にあたる所にあつて，建物の大部分は物理が使つていた．真中に大きい階段教室があつて，今図書室になつている方角のあたりの二階の角の教室で，二年三年の講義があり，別にみすぼらしいバラックの教室で，一年の講義と聴講者の少ない講義があつた．この二階の角の教室で数学の年会があつたものである．40 名か 50 名集つたであろうか，一教室で二日にわたる年会であつた．第一日が済むと晩に会食があつた．私が卒業して入会した年の会食では，高木先生が‘もう近いうちに停年になる’と挨拶されて，驚いたことであつた．しかし当時先生はまだ五十までに二，三年はあつたので，1920 年には主著が現われ，この年会の直後には相互法則に関する大作が出たので，先生にとつて最も記念すべき時期におられたわけである．当時東大で教授の停年制が問題になり，藤澤先生あたりが強硬に主張されて，此年の三月例を示して退職されたので，高木先生があのようなことを仰せられたのであろうか．私は其後九大に赴任し，2 年経つて東大に帰つてから外遊するまで 3 年ばかりの間は，学会の雑務をみていたが，物理の方でたいていのことは片附けてくれたので，たいした仕事ではなかつた．学会が今日のように大きくなつたのを見ると，まことに今昔の感に堪えない．数学物理学会は，毎月集会を催していたが，戦後数学会になると，これは止めになつている．

雑誌においても，数学と物理が一緒で，数学の論文は一部分に過ぎなかつた．当時数学の欧文誌は，東大・京大・東北大の理学部機関誌の外，東北数学雑誌と数学物理学会誌だけであつた．学術研究学議（学術会議の前身と見做すべきもの）が数学輯報を出し初めたのは，1924年のことで，これは数学専門の雑誌であつたから，当時はこの方に力作が集つたようである．今日輯報よりも学会誌の方が盛んであるのと，対蹠的である．学会誌が盛んになつたのは，物理と分離したことが，主な理由の一つに相違ない，私が入会した時に，既に分離の話はあつたのだが，実現できなかつたのである．数学物理学会が創立された時には数学者の方が多かつたのに，次第に物理学者が増して，分離しなければならない状況に来ていたのに，資産の分割等のことに拘つてできなかつたのが，戦後やつと分離独立することになつた．それにしても以前の方が気分はのんびりしていた．これは数学者の数が少なかつた所為もあるであろうが，戦後学術会議が出来て，学会というものがこれを中心にして学術行政的色彩を持つことになつた所為もあるようである．

数学会の歴史は，日本の数学の発展史でもある．80周年ということで，想い出の拙文を書き纒めようとすると，間もなく停年退職の自分の過去が想い出されてまことに感無量である．

回　　　想

清　水　辰　次　郎

日本数学会はその前身である日本数学物理学会，東京数学物理学会，更に数学会社の時代から八十年になる由である．私の東京大学入学は大正九年七月であるから私はその当時以来よりしか知らない．入学後二，三年頃毎年四月に日本数学物理学会の年会なるものが開かれそこで数学や物理学に関する研究が発表され，それが我邦唯一の専門学会であることを知つた．

その頃のことは記憶のはつきりしない部分もあるが年会は東京大学で数学と物理学とは別々に別れて発表があつた．二，三年たつうちに数学の発表にこられる方々は大体同じような方々であることに気がついた．しかしその当時の研究発表の数は全部で十五から二十位のものであつた．主な方々は私達の先生である高木貞治，吉江琢児，竹内端三の諸先生，その他には東北大学の藤原松三郎，窪田忠彦両先生と当時東京文理科大学にこられた掛谷宗一先生などである．その他私の記憶に